
それもみんな愛のかたち

天瀬 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それもみんな愛のかたち

【Nコード】

N0672I

【作者名】

天瀬 漣

【あらすじ】

短編連作です。痛々しいものを、痛々しく、生々しく、書いてます。

叫ぶ（前書き）

流血・暴力的な表現がありますのでご注意ください。

叫ぶ

ああもうどうせなら狂ってしまえばいいのだ。

俺と主を繋ぐこの尾を断ち切って、世界を駆ける夢を見る。その夢はとも明るくて綺麗で甘くて、少しつらい。それは眼が醒めたときのつらさ。こんな夢なら一生見てたい。こんな夢を一生見れるなら死にたい。でも夢はときどき酷く怖い。主にさんざん追い回される夢を見るときなんて最悪だ。便所に立てこもって鍵掛けようが金庫にちいさく蹲って鍵掛けようが、どんな隙間からも奴は入り込んでくる。なんでだ。

主は時折気紛れにやってきて、この矮小な俺をあらん限りの手を尽くして叩きのめして去っていく。これ以上ない苦痛を与えて、ゴミのように扱って、かと思えば、お前がいなければ生きていけないなどという。お前を失えば己も死ぬという。じゃあ俺を殺してお前も死ぬよと言ってやりたいけれど、いつも俺は沈黙する。沈黙する。いつからかこの口は苦痛を訴えることを諦めて、喜びを謳うことを忘れて、ただ整然と正しい言葉だけを生産する機械になって久しい。沈黙する。沈黙する。沈黙する。

ただ、歯を食い縛って、目を硬く閉じて、世界を遮断する。

腕をもがれ足を潰されてもそれでもこの咽喉は痛みを訴えない。どうせなら頭も潰してくれよ。どうしてそこで容赦なんてするんだ。どうせゴミだろ。要らないんなら捨てるよ。殺せよ。もっと殴れよ。頭蓋骨へし折るくらいに滅茶苦茶にしてくれよ。

どうせただの排泄だったんだろ。

こんな尾がひとつ繋がっているくらいで、どうして、あんたは俺の主なんだ。ちくしょう。噛み切ってやるよこんな脆弱な尾。ああ

でもちくしょう、どうしてだ、歯を立てれば立てるほど、俺も痛いんだ。そうか当たり前だ。この尾は俺の一部だもんな。でもどうしてあんなに痛いのか。慣れたる筈なのに、こんな些細な痛みが耐えられないんだ。いてえ。いてえ。どうしてなんだよ。でももうどこがいてえのかわかんねんだよ。くそやろうが。

目が醒める度に、生きている自分を呪う。ああ、なんでこのポンコツボディはまだ呼吸をやめないんだ。もういいだろ、もういいだろ。もう散々生きただろ。もう充分だろ。一生分の苦痛をもうこの神経は受けただろ。もう磨耗してもいいだろう。なあ。どうなの、この弱いんだか強いんだかわかんない俺の神経ちゃん。どうせならぶつちぎれて何も感じなくなればいい。それぐらい強ければいい。どうしてまだ俺の身体は痛みを憶えてるんだ。もう要らないんだよ、こんなもの。どうして俺はまだ思考している。要らないんだ。要らないんだ。要らないんだ。

どうしてまだこんなに苦しいんだ。

この苦痛がなくなるならなんだってするよ。信じちゃいけないけどカミサマとやらに祈ってもいいよ。でも祈っても治らないんだ。だから信じちゃいけないだけだな。カミサマお願いですお願いです、明日目が醒めたらこの尾が断ち切れて、晴れて俺は自由の身になっていますように。とか何とか言っちゃって、失望した朝は両手の数では足りず。ああもうだから朝は嫌いだ。朝は絶望だ。

この牙はただただこの薄い唇を噛み締めて血を流すくらいの役にしかたたず、この細く長い尾ひとつ噛み千切れない。なんのための牙だ。なんのための爪だ。さあ、駆けていこう。俺は俺だ。この牙ひとつ、この爪ひとつで生きていこう。何処へでも行けるだろう。そうだ何処へでも行けばいいんだ。

でも何処へ行けばいいんだ。

沈黙する沈黙する沈黙する。

お願いだ愛してるなんて言わないでくれ。そんなあたりまえの顔して嘘をつかないでくれ。俺とあんたは、言語が違うんだ。そうだ、

言語が違うんだ。同じ言葉の形でも、意味するものは林檎と猫ぐらい違うんだ。そうだ。

なんでなんだ。

もう狂ってるのか。これが狂ってるというのか。どうして痛いんだ。狂うってもっとこう、あれじゃないの、もっと何も無いんじゃないの。

ちくしょう。

いつかこの沈黙を破って俺は喝采を叫んでやるんだ。そうだ。そのときこそ俺は本当の意味で喜びも悲しみも怒りも語ることができるんだ。ああでも俺はいつだってどんなときだって叫びだしたいんだ。もう限界なんだ。もう無理なんだ。でも沈黙する。俺はただ堪えて、きつく歯を食い縛る。

お願いだ。俺を捨ててくれ俺を殺してくれ。お願いだ。アンタを憎ませてくれ。

俺がアンタを愛してるなんて嘘だ。

祈り（前書き）

流血・暴力的表現を含みますので、御注意ください。

祈り

ああ、キモチイイ。

ねえ、もつと。もつとちようだい。そう、もつと。ずっとこのままがいい。ずっとずっとずっと、このままがいいの。そう、もつと。もつと強く。

ああ、でも、ダメ。これ以上されたら、気を失っちゃう。だめ、そんなのダメ。意識が途切れたら、終わってしまう。そんなのダメ。赦せない。ねえ、もつと。もつともつともつと。

もつと傍にいて。ずっと私を痛めつけていて。ねえ。お願い。お願い。

こんな細い尾ひとつじや、駄目なの。不安なの。怖いの。

もつと、もつと確かなものをちようだい。ねえ、そう、このままずっと。

痛いのがいいの。

全身、腫れあがって、熱の塊になって、そう、ああ、生きてる。

今、私、生きてる。ね、生きてるでしょ。ああ、ほら、主さまが笑ってくれてる。ねえ、私、イイコ？ふふ。イイコだって。ねえ、もつと笑って。そう、もつと。

主さま。

あなただけなの。あなただけなの。お願い、真っ暗にしないで。

どこにもいかないで。私以外のやつに触れないで。ずっと私の傍にいて。お願い。お願いだから。扉を閉めないで。私頑張るから。もつと、もつともつと痛いのガマン出来るように頑張るから。お願い。私の意識を奪わないで。お願い。もつとずっと永遠に続く痛みを。駄目。途切れないで。お願い。他所を見ないで。私を見ていて。私だけを見ていて。お願い。ねえお願い。

だめ。

お願い。気を失っちゃ駄目。お願い。ねえ、もっと、頑張って私。主さまが、出て行ってしまう。だめ。そんなのダメ。お願い。もっと。もっとここにいて。私だけを見ていて。この痛みを他の誰かになんて与えないで。ねえ、私達だけのものにして。

ああ

他のやつらなんて皆死んでしまえばいいのに。今、この瞬間。強く念じることで誰かを害することができるというなら、もうとつくに呪い殺せてるはずなんだけど。ああ、まだかなあ。まだ足りないのかなあ。じゃあもっと祈るね。早く皆死んでくれますように。そして私と主さま二人だけになりますように。二人だけになりますように。

血溜まりに涙がおちる。目からも鼻からも口からも、いろんな液体が滴る。どくどくと、熱を伴って、落ちていく。ああ、こんなに泣いてるのに。ねえ、主さま。どうして行っちゃうの。どうして私以外のやつを愛すの。ねえ、愛してるって言ったじゃない。どうして私だけにしてくれないの。どうして、他のやつらなんてつくったの。

こんな、こんな細い尾ひとつだけなんて酷い。もっと、もっと確かなものをちょうだい。ねえ、主さま。咽喉も腫れあがって声が出ない。漏れるのは嗚咽ばかり。あるじさま。ねえ、私がこんなに泣いてるのに。目からも鼻からも口からも、全身から、たくさん、赤い涙を流してるのに。叫べない。もう、この身体にはそんな力も残ってない。

ねえ、あるじさま。

愛してるのに。

愛してるのに。

愛してるのに。

あなたは私だけのものじゃない。

だったら殺して食べて。

私をあなたの一部にして。

愛してるなら、そうして。

こんな尾ひとつが証なんて、信じられない。

お願い。

齒も折れて欠けて不揃いで、鼻は折れ曲がって凹んで、ろくに喋ることもできない私が喋ると主さまは喜んでくれる。でも私の願いは届かない。正確な発音を失った私の口から出た言葉は主さまに届かない。

主さま。

ねえ、お願い。

精一杯で微笑む。

ねえ、醜いでしょう？

これがあなたの愛のかたち。

これが私の祈り。

主さま。

祈りは今日も届かずに、きっと私はまたこの血溜まりの中で目を醒ます。

ああ、世界など、今この瞬間に終わってしまえばいいのだ。

3 ・泣く（前書き）

流血を伴う表現が含まれていますのでご注意ください。

3・泣く

ねえぬしさま、これはなんというもののなの。

いつもぬしさまはなにもいわない。

ただやってきて、椅子というものにすわって、じっとわたしをみているだけ。

この部屋には本というものがたくさんある。

本というものが本ということも、本というものからしった。
でもしるってなに。

ぬしさまはいつもなにもいわない。

わたしもなにもいわない。

わたしの喉というものは、声というものがだせないらしい。

声ってななに。

歌ってななに。

本というものにはすべてのことがかきしるされていて、わたしは
それを読むということが出来る。

でもこれは知っているということなのかしら。

ぬしさま。

たったひとつ、あなたかくれた主という言葉というもの。

これは、なんて読めばいいの。

ねえ、わたししっているの、たくさん読みの方があるのよ。

おしえてほしくて、でもここには書くものがないから。読み古した本を破って、わたしは指というものを噛み切る。しっているの。

こうすると、血というものが出てくるって。

わたしはたくさんの文字を描く。

ねえ、声を聴かせて。

歌をうたって。

優しいってなに。

悲しいってななに。

憎しみとか、愛とか、たくさんの本に出てくるものたち。感情と
いうものたち。

この、本の中にあるものは、本当にこの世界に在るの。

ねえ。

ぬしさま。

あなたのよびかたは、これであっていますか。

けれどぬしさまはなにもいってくれない。そしてもう、どんな文
字だってわたしにはくれない。もう、部屋中の紙という紙は真っ赤
に染まってしまつて、上書きはできない。

ぬしさまは、あたらしい本はけしてくれない。

ごめんなさい。

全部、血で汚してしまつた。

これで、あつてる？

わたしの言葉はただし？

ごめんなさいでいいの？

確かめたくても、本はもう全部真っ赤だから。本当にそこにそん
なものたちが存在していたのかもよくわからない。

ぬしさま。

お願い。

声をきかせて。

歌をうたつて。

あなたのよびかたをおしえて。

床の最後の隙間が赤く埋まる。乾いて、固まつて、また掘ったら、
また書けるかしら。

ぬしさま。

つんと鼻の奥が痛い。こんなところも痛くなるのってふしぎだけ
れど、しってる、これは、痛いというものだろう。きっと、たぶん。

そして、あつい。きつとたぶん、あついというもの。眼が、あついなに。これはなに。なにかが、ぎゅつとわたしの奥からくる。だめ。これはなに。落ちてしまう。眼があつい。わたしの眼は壊れてしまったの。でも壊れるってどんなこと。

ぬしさま！

——わらって、いるの？

それが、ほほえみというもの？

ああ、初めて見た。やっとわたしは、知った。

ああ、ぬしさま。

わかったわ、これが、涙なのね。

ああ、やっとわたしは知ったんだ。

ねえ、次にぬしさまがくるまでには、床を綺麗にしておくから、お願いどうか、その時は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0672i/>

それもみんな愛のかたち

2010年10月30日09時57分発行